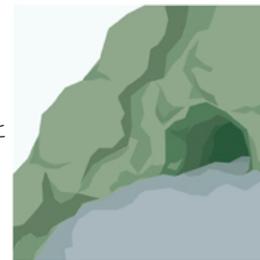


金山の穴（一宮町井手）

多賀、妙京寺前、県道ぞいに大町へぬける旧道がある。その道を百メートル井手の方へいくと田のこせにほら穴があります。中に一ぱいきれいな水がわき出ています。戦時中はこの近くにかう乳牛の乳をここでひやしていたそう。その穴が黄金を堀り出した穴だといわれています。江戸時代の終わりごろのことです。



近くに住むのござりうえもんが息子のメ（しめ）蔵に

「なあメ蔵、この金山の穴を江戸時代の始めに、なんでもあの金（きん）がうずまっていると言って、ほったんだがまだあると思うんじゃ。」

「おとつあん、いっぺん村の若いしゅうみんなと調べて見ろか。金（きん）があつてみい、えらいこつちゃぞ。」

「そうしてみい、それから二百年もたつとるもん。」

そういうことで村の若い衆にはかると、

「ほんまじゃ、ほんまじゃ。うちのじいさんもそないいうとつたぞ。」

「よし思ひ立ったが吉日と昔から言うだろ。さっそくあしたやらんかよ。」

「みんなで中へ入るんだつたら二十四・五人もおるからよく分かるぞ。」

そう言つてみんなが家へ帰つて行きました。しかしその翌日、みんなはおじけて集まつてこなかつたのです。二百年前に堀つたといいますが昔のことは分かつたらず心配だったのでした。

「なあメ蔵、誰もきいへんなあ。せつかく言いかけたんだ、わしら二人でやってみるか。」

「そうや、おとつあん。わしも入るぜ。今調べとかんとならへんからなあ。」

すぐ二人は近くの伊弉諾（いざなぎ）さんにおまいりをして、ごきとうしてもらいお札（ふだ）をいただいてきました。それを聞いた村の人はひとり、ふたりと大勢集まつてきました。みんなにおいとまごいをした二人はお札をしっかりと腰にくくり、体を縄でしばり中へ入つていきました。

いけどもいけども、ブクブクした足のねりこむ穴です。ローソクの火におどろいたこうもりが時々バタバタととびかいます。ところにより胸のあたりまで水につかつてしまいます。

「なあメ蔵、何もないなあ。昔の人は金が出ていたから金山の穴と言つていたが、単なる伝説であつたのだなあ。」

「ほんまじゃ。どんな穴かと思つたが、それにしても用水路だつたら穴がつきぬけてあるのに、ゆきどまりで、ちょうど九十七ひろ（一ひろは約一・五メートル）おかしい穴だ。」

「昔の人は何を考へてこんだけ堀つたんだらうか。」

ボタバタ頭の上から落ちてくる水に体中びしょぬれになつた二人は、ようよう穴から出てきました。

外でいくらたつても出てこないのみんなはとでも心配してました。元気に出てきた二人を見てみんなはホツとしました。でも外に出たとたん急にござりうえもんは、

「あつ頭がいたいッ、ガンガンする。こりゃいかん頭がわれそうだ。」

「あつおとつあんわしも耳がガンガンなるぞ。いたいッ、いたいッ。」

はちまきをしっかりとしめたがどうしてもなおらないのです。中の一番年いった人が、

「これはいけな、中へ入つたからいかんかつたのだ。この水をくんでいんで風呂をたいてはいつたらなおるかも知れん。そうせんか。」

さっそく穴の水を、にないにくんで帰り風呂にたいて十分にぬくもりました。体がホカホカぬくもつてくと頭なりがなおつてきました。耳なりもとまりました。

このことを伝え聞いた人は、自分の悪い病気をなおしたいと思ひこの金山の穴の水を汲みにくるようになりしました。ずい分遠い所からもたくさんこの水を汲みにくるようになりしました。この穴の前の小さい田のそばに茶店もでき、とてもにぎわいましたが、まもなくすたれてしまいました。

へんてつもない穴じゃが、とてもにぎわつていたのじゃと、縁側で腰をおろして話すおじいさんのきせるの先から煙は高く高くのぼつて消えていきます。